一、御扶持方・御下行に而會所銀借用仕罷在、其者御知行被下候時は、右返上之月、御知行取之返上口に仕候段、支配頭より願紙面御月番迄指出、其趣被仰渡候得ば、證文改申に不及候事。

一、御步・同並之者、連判故障有之、兩人に成候へば、難見通趣に候得共、近年願に而成申候。且又右並之者、三人連判に而茂、會所銀借足罷成候。時々願に而被仰渡有之事。

一、新番組之者、請人に與力相立申儀、不罷成事。

一、京都・大阪・遠所在住之人々借用之節、其支配より見合判・印鑑、時々印形添紙面を以到來、見合候事。

一、會所銀借用之面々、御參勤之御供立は、六月借用に而も、來年十二月元銀半分返上之證文也。詰人之分は、六月迄は當十二月元銀半分返上之格也。

一、會所銀借用、御年寄中に而茂、請人取申御格。

一、同請人、陪臣之分は、見合に而は不罷成格也。たとひ其主人より添紙面に而茂、不罷成候事。

一、會所銀急借用之節は、丁日場濟候以後・半日に候へば、其段御月番より被仰渡次第貸渡申候。御かね御土藏より取出申儀、御横目初棟取等呼に遣し、出座有之、左候へば指支遲々に成候に付、小拂奉行申遣、急御用之趣に而、假切手に而小拂より銀子受取相渡、丁日に會所銀所に申談、銀子小拂に遣、切手取返申筈之事。

一、請人之儀に付、年寄中に指出候紙面之寫。

御家中借用會所裁許御貸銀、借用人與力等に而御座候へば、請人御步並一人、又家中知行取申者一人指加、貸渡申候。借用人御昵近に御座候へば、唯今迄御步並御切米取一人、又家中知行取一人相加り申候而茂、貸渡不申候。先年より右之趣に而借用仕候者無御座候に付、當時も其通相心得罷在申候得共、先年者請人茂多く御座候故、御步等御昵近請人には相立不申候哉与奉存候。御步・又家中知行取、御昵近借用仕候刻、請人に取不申筈に候御格も無御座候間、右之類之者兩人、御昵近借用受人に相立、指據申事に而は有御座間敷儀に奉存候。近年以之外請人差支申候間、是以後御昵近之者借用請人、御步一人・又家中知行取一人に而茂、銀高御格に相違不仕候はゞ、指支不申樣に可仕候哉与奉存候に付、相親申候。以上。

亥九月廿七日

原田又太夫
中村藤太夫
高田兵左衛門
安見傳藏

本多安房守殿

右之趣以紙面相伺候所、九月晦日御用番安房守殿被仰聞候者、先達而太左衛門迄被申聞候趣、令承知候。段々請人指支申儀に候間、成程紙面之通向後相心得可申候。何茂致僉議申渡候旨、中村藤太夫に御申渡被成候事。

一、御國之內爲御用一年相詰申者、罷越候時分會所銀致借用、其暮半分返上仕、罷歸候時分借足候先例無之由に候。乍然御國之內に而茂、一年相詰候儀に候へば各別に候條、向後御國之內一年詰之者、罷歸候節返上分引足可被貸渡候。

一、會所銀借足候時分、上殘之銀高指出不申候而茂、右上殘共證文詰候而、其時分借證文爲相改可被申候。以上。

丁未閏正月十一日（享保十二年）　長九郎左衛門　印

會所御奉行中

一、高屋・皆月舟破損御用は、其年之內罷歸候に付、罷歸候時分會所銀借用不罷成。河原山・木滑、此兩所は成候事。

一、土清水に罷越居申候御異風中罷歸候人々茂、會所銀借用仕候格也。

八　會所銀貸附知行當り之儀御定

會所銀知行當之覺

一、他國詰人等、百石に付一貫目宛之事。

但、借用之翌年より五ヶ年に返上、無利足之事。

一、御領國地廻之分、百石に付六百目宛之事。

但、返上之趣等右同事。

一、新番以下御扶持方御切米之人々は、他國詰人等六百目充、地廻之分四百目充、返上之趣等前段同事。

一、知行當借用之翌年、他國并地廻往來之節、證文改候儀可爲前々之通候。且借用之內一兩年分返上之上、他國詰等并地廻往來之節、證文改知行當之高に引足借用之儀、勝手次第之事。

一、人により知行當より內を借用之人々茂、其內を以右御定之通、五ヶ年に返上之事。